その結果、いろいろな仕組みが動き始めることとなりました。

・みんなで作った薪が地元の銭湯に使われたり、薪ストーブユーザーに頒布されるようになった
・物置や木道、トイレ設置など、最低限のインフラが手作りで進められるようになった
・作業馬による整備（馬搬や草刈り）が導入され、より化石燃料の使用率が下がった
・それを進めるホースロガーが育成された
・森のようちえんで培われた手法を展開し、小中学校の授業として活動を提供するようになった
・植樹祭で植えられた苗が間伐時期を迎え、その間伐を幼児や元幼児がのこぎりを使って切り出すことができるようになった
・他の山林で、同様な活動を横展開するようになった

と、一部マニアの集まりと言われることなく、これまでの活動が評価され、しっかりと現代社会に位置づけられるようになったことは大きな成果であると考えています。

でも、一番大切なのは、

・元幼児だった子ども達が大きくなり、より高い技術と体力を使って積極的な森林整備に関わるようになった
・あるいは、この活動でられた知見を他のシーンで有機的に活用するようになった（ESD,SDGs の取り組み）
・お母さんたちの起業や新たなソーシャルビジネス創出を促した

と、関わった子どもや保護者の方の生き方が変わった、ということです。それは関わったすべての人がそうなったわけではないのですが、教育という手法を取り入れた以上、関わった人の心の中で何かが変わり、それは心の中だけでとどまるのではなく、明日からの「行動」「アクション」が変わらないとミッション達成ではないわけですし、それを少し証明できたことで「ここまでやってきたことは間違っていなかった」と言っても良いのではないか、と考えているところです。

ただ、これらはあくまで「ここまでやってきたこと」、でしかありません。つまりそれは過去でしかなく、未来を証明するものではない、ということも事実です。

こういう活動は、電車に後ろ向きに座って窓の景色を眺めているようなものだと考えています。

これまでやってきた約１０数年の過去という車窓の風景の延長から、「将来は、ひょっとしたらこうなる、かもしれない」という未来にあるものを的確に予測しながら、森のようちえんによる森づくりを進化させていきたい、と思います。

発行日　令和２年11月
発　行　苫東・和みの森運営協議会事務局
編　集　苫東・和みの森運営協議会事務局
北海道苫小牧市泉町１－５－６
TEL/FAX　0144-82-7860